

味わい方叢書

川端文学の味わい方

長谷川 泉



明治書院

川端文学の味わい方

長谷川 泉



明治書院

長谷川 泉 (はせがわ いずみ)

大正7年、千葉県に生まれる。昭和17年、東京大学国文学科卒業。近代文学専攻。学習院大学講師、医学書院編集長。昭和34年近代文学研究により久松賞受賞。著書：『近代日本文学評論史』『近代日本文学思潮史』『近代文学研究法』『近代名作鑑賞』『森鷗外論考』正・続『川端康成論考』『川端文学への視点』など。

味わい方叢書 川端文学の味わい方 880円

昭和48年9月20日 印刷 © 1973 I. Hasegawa
昭和48年9月25日 発行

著 者 長谷川 泉

発行者 株式会社 明治書院
代表者 三樹 彰

印刷者 株式会社 共立社印刷所
代表者 春山宇平

発行所 株式会社 明治書院

東京都千代田区神田錦町1の16 郵便番号 101
電話 (03) 294-5336(代) 振替口座 東京4991

0393-24601-8305

正文社製本

は し が き

ノーベル賞受賞以前に、川端文学の本格的な研究書や鑑賞指導書が、あまりにも少なかったことは有名な事実である。そのことは、川端文学の味読が容易でないことを、端的に示したものである。

ノーベル賞受賞後は、海外の研究者の示唆や比較文学的な開眼もあって、川端文学の受容は急速に次元が高められた。本書は、そのような機運を受けて世に送られることになった。

本書の構成は三部からなる。

第一部においては、川端文学を理解し享受するにあたって、まず巨視的に把握しておいたほうがよいと思われることから、概観的な展望を試みた。川端康成その人の文学的人間像の究明や、川端様式の概説、および近代文学史における位置づけをおこなったのは、そのためである。

第二部においては、川端文学の面白い方の実際を、具体的な作品について追求した。『十六歳の日記』に始まり『片腕』に及ぶ。できるだけ多くの作品をとりあげるように心がけ、またとりあげる作

品については、川端文学様式の多彩な実態が味読できるような配慮をしてある。

『バツタと鈴虫』『夏の靴』『心中』は、掌たなひらの小説といわれている作品である。百三十編に近い掌の小説のなから、この三編を抽出したのは、それなりの理由がある。この掌の小説のそれぞれの作品については、中編小説や長編小説と同じような比重を与えて論じてある。散文詩のような作品群であるから、文章の一語一語についての吟味をおこない、行間に埋没している含蓄を解明するようにつとめた。

初出文と定本文との間に、いちじるしい相違のあるものについては、その推敲の過程で、作家の創造の工房が、どのような錬金術の秘密をあえてしたかについての解明にも配慮を怠らなかった。そのような方法をとったものについては、容易に初出文が入手できない作品も含まれている。

また未完の『故園』を加えたのは、この作品が戦争末期の困難な時代にあって「文芸」に連載され、菊池寛賞を受賞しながら、再録されることなく埋没していることを惜しんでのことである。身辺の自伝的な要素を多く持つばかりでなく、含羞・遅疑の裡に、筆者の素面と仮面の膚接する重要な作品であるからである。

第二部に収めた作品の味わい方のうち『抒情歌』『禽獣』『名人』『山の音』『片腕』の五作品については武田勝彦氏、『死体紹介人』については鶴田欣也氏の執筆になる。武田氏はトロント大学やハワイ大学において、大学院学生のゼミナールにおいて精力的に川端文学を取り扱い、国際的交流の場で

えられた成果を盛りこまれた。ブリティッシュ・コロンビア大学の鶴田氏は『死体紹介人』を論じながら、他の川端作品にも発展する視点を提示されている。両氏の協力に感謝する。

作品の配列は、原則として編年の体裁をとった。

第三部においては、川端文学の味読の落ち穂拾いの文章を収めた。すでに一周忌もすぎ、故郷茨木市では一周忌に際しての講演会が、川端文学研究会によって催された。まことに早い歳月の移りゆきである。

川端文学には、推敲の極致によって、文質の彫琢のいちじるしい典型である『雪国』のような作品がある。日本の古典はおろか、海外文学を巧みに地の文に埋没させ、仏典だけでなく、聖書も文学的教養としてその培養基を形成した秘法は端倪を許さないものがある。

川端文学の味読が容易でなく、一筋縄ではゆかないと言ったのは、そのことにもつながる。本書の一部には、そのような手法の解明と、そのことにいどむ示唆をあきらかにしてある。

本書が、今後は世界的視圏のうちで深められてゆく川端文学味読の指標として果たしうる役割があれば幸いだと思う。

昭和四十八年八月

長谷川 泉

目次

I

川端康成の人と文学

近代文学史における川端康成

川端康成と横光利一

川端文学のヒロインたち

II

十六歳の日記

『新晴』と『篝火』

9

23

45

55

79

87

バッタと鈴虫

夏の靴

心中

『ちよ』から『伊豆の踊子』への発展

死体紹介人

温泉宿

浅草紅団

春景色

抒情歌

禽獣

故園

『雪国』と『雪国抄』

名人

千羽鶴

山の音

101

109

117

125

132

145

155

161

168

174

184

191

211

224

228

眠れる美女

古都

片腕

265 260 250

III

川端康成の本

281

川端さんの故郷宿久庄を訪れて

287

川端さんの書

292

川端文学の死生観

294

I

川端康成の人と文学

人間形成の過程では、父母きょうだいを中心とした家庭のあたたかな雰囲気は尊い。まだ社会的な訓練をへない、人の世の荒波にもまれない幼い心身は、肉親の庇護ひごによって、しだいに生長してゆくからである。いちにんまえになってからなら、どんな狂瀾怒濤きやうらんどとうがおしよせてもかまわない。だが、心身ともにひよわな、幼い時には、世の荒波から守ってくれる防波堤が必要である。それが肉親というものである。

川端康成は、幼くして、肉親の愛を失った。明治三十二年六月十一日、大阪市北区此花町に、父栄吉・母ゲンの長男として生まれ、姉の芳子と二人きょうだいであった。父は医師であったが病弱であった。康成が数え歳三歳のときその父が死んだ。四歳で、母も死んだ。康成は、もの心つくまえに、不幸にも両親の愛を失ったのである。四歳の時からわかれわかれになつていた姉も十一歳の時に死んだ。康成は、父母を失ってから祖父母の手で育てられたのだが、その祖母も八歳の時に死んだ。

そして祖父とさびしく暮らした。この祖父も十六歳の時に死んだ。この祖父が病気になって死に瀕している姿を、写生的に書いた名作が『十六歳の日記』である。

孤児の感情とは、肉親の愛情を失っての孤独な気持ちである。愛情というものに餓えて、心の空洞を見つめる気持ちである。そしてまた、とかくひがみつぽくなり、外部に対して固く心を閉ざしたかたくなな気持ちである。そのような孤児の感情を、何らかの意味で作品に盛りこんだものには『十六歳の日記』『ちよ』『葬式の名人』『孤児の感情』『伊豆の踊子』『篝火』『父母への手紙』『父の名』『故園』などがある。ある部分には、孤児の私小説的な顔がのぞいている。ある部分は、孤児であったことへの回想的な心の嘆きである。そしてまたある部分は、作者もおそらくははっきりと意識しない、現在の幸福への反証でもある。慈愛というものをありがたがる川端文学の本質には、子供心にせつなく焼きつけられた孤児の感情がはぐくまれた典型がある。その顔を知らず、その命日を覚えない父母の幻影に対する慕情が定着されたものであり、そこに墓碑銘が刻まれている。

康成は早死した父母の虚弱体質を受けているためであろうか、その体軀は貧弱であった。『五月の手帖』には、次のような文章がある。「徴兵検査。『体重、十貫八百三十。』検査の二日前に故郷の郡役所のある町へ着いた。宿屋で食事毎に生卵を三個飲んだ。その前一月、伊豆の温泉に行つてゐた。にもかかはらず、郡役所の広間で恥をかいだ。」と。

今でこそ、徴兵検査はなくなったが、二十歳の康成の哀切きわまる虚弱体質のデータである。一か

月も温泉で保養し、検査にそなえており、そして食事ごとの生卵三個の効果もうすく、十貫余の体重であつたとは、涙なしに読めるものではない。この体重は、今でいえば、小学校の学童の体重である。しかもなお、康成はかなり長命であつた。同じ新感覺派の文学グループのなかでも、横光利一すでに逝き、片岡鉄兵も没し、岸田国士もこの世にないなかであつて、康成は老境にはいっても健在で、旺盛な作家活動を続けたのである。

川端家は北条氏の出であらうか。『文学的自叙伝』には、「私が北条泰時三十一代かの末孫といふ、疑はしい系図がある。」とされる。それはともかくとして、祖父康壽は漢方医の心得があり、また易学や家相学にくわしく、出版を企てた「構宅安危論」があつた。父栄吉は谷堂と号し、漢詩や文人画のたしなみがあり、文学趣味があつた。上京して長谷川泰の済生学舎に学び、帰郷して開業医師となつた。

康成の文学的資質を考える場合に、その体内に流れている父祖の血を無視することはできない。『末期の眼』のなかに次のようなことばがある。「芸術家は一代にして生まれるものではないと、私は考へてゐる。父祖の血が幾代かを経て、一輪咲いた花である。」「旧家の代々の芸術的教養が伝はつて、作家を生むと考へられるが、また一方、旧家などの血はたいてい病み弱まつてゐるものだから、残燭の焰のやうに、滅びようとする血がいまはの果てに燃え上つたのが、作家とも見られる。既に悲劇である。」と。まさしく康成は、病み弱まつた血統に一輪咲いた花であり、残燭の焰の悲劇に彩ら

れているものであろうか。「祖父以外の両親の顔も覚えず、一つの血統が減びようとする——最後の月光の如き花で、僕はあるらし。従つて子孫を残さうと思はず。子を育てんより犬を育てんかな。」とは『嘘と逆』のなかのことばである。

康成には養女はあるが実子はない。「子を育てんより犬を育てんかな。」ということばのそのままの実践であるかのように、康成は一時多くの小鳥や犬を飼っていたことがある。人の世の人間関係のわずらわしさを避けて、生命の純粋な発露を小鳥や犬のような動物の世界に見たのである。『禽獣』は、そのような世界を描いて、名作の評が高かった。

*

愛情に餓えていた孤児の感情を救ったものが四つあった。(一)茨木中学校の寄宿舎で体験した同室の下級生の少年に対する同性愛の体験。(二)旧制一高から東大および同人雑誌時代のよい先輩や友人。(三)幼い恋愛体験。(四)伊豆の風物や人情。以上がそれである。

康成の一高時代の同級には石浜金作・酒井真人・鈴木彦次郎・守隨憲治らがいた。そして東大に進学してからは、第六次「新思潮」の文学グループが好ましい雰囲気を作った。そして「新思潮」を通じて知った菊池寛によって、康成は文学的にも、また私生活の上でも大きな庇護を受けることになった。そして菊池寛に紹介されて知った横光利一とは、お互いに刺激し合つて、新感覚派の双壁とたたえられるにいたった。横光利一が死んだ時、康成はその弔辞のなかで切々たることばを述べた。「君

の名に傍^そへて僕の名の呼ばれる習はしも、かへりみればすでに二十五年を越えた。君の作家生活のはとんど最初から最後まで続いた。その年月、君は常に僕の心の無二の友人であつたばかりでなく、菊池さんと共に僕の二人の恩人であつた。」と。

伊豆の地は、康成の青春時代の第二の故郷であつた。康成が初めて伊豆に遊んだのは一高二年生の時、大正七年である。この時、『伊豆の踊子』のモデルである旅芸人の一行といっしょになつた。以後十年間、康成の湯ヶ島通いは続いた。湯本館が定宿のようになり、一年の大半をすごすこともあつた。伊豆の自然はひなびて美しく、人情はこまやかに醇朴^{じゅんぱく}であつた。身も心もいためられていた康成を、伊豆の自然と人情は、あたたかくかさいだいたのである。のちに『伊豆の踊子』と『少年』の原型となつた『湯ヶ島での思ひ出』が書かれた。そしてまた康成の初期の作品群のなかには、伊豆を舞台にし、伊豆の風趣を描いたものが、きわめて多いのである。

茨木中学時代の康成の同性愛の体験は『少年』に描かれている。汚濁^{むじやく}の思い出はなく、その少年の純粋な気持ちによって康成は救われたのである。かわいた心に純粋にこたえてくれるものの存在を知つて、孤児のひがみは浄化されて行つたのである。

それにくらべるならば、十六歳の丙午^{ひのえうま}の娘と婚約し、それに敗れた恋愛体験は、康成に恋心のせつなさを与えるとともに、失恋の苦汁を味わわせることになった。二十三歳の康成は、十六歳の娘と真剣に結婚することを考え、菊池寛にも相談している。菊池寛は外遊中の自分の留守宅を幼い新婚夫婦

に提供し、なおかつ生活費の面倒を見ることも約束した。不幸にもこの婚約は、少女の心がわりによって破談となった。しかし、康成は永くこの少女のことが忘れられず、その姿を追い求めたのである。この少女は、康成が一高の「校友会雑誌」に発表した唯一の作品『ちよ』に祟^{たた}られたとされる。このことを、康成は『処女作の祟り』で書いている。ここでいう処女作とは『ちよ』のことである。『ちよ』という小説を書いたことで、その『ちよ』と同名のちよという女性に祟られて、失恋のうきめを見ることになったことがしるされている。康成は、この少女のことを『南方の火』『篝火』『非常』『霰^{あられ}』に書いたばかりでなく、『父母への手紙』や『伊豆の帰り』や多くの掌^{たなごころ}の小説に書いている。のちに再会したこの女性への恋心のはげしさは、その郷里にまでたずねて行って毅然として思い断ちがたいことを告げるならば「落日もかへり、山も動かん。」と日記にしているのであるから、それは「若きウェルテルの悩み」の日本版ともいえるべき熱烈な恋であった。そむき去られたとはいっても、このように真剣に人を愛することができた体験は、生涯消えないものである。あたたかな恋心は、いじけゆがんだ孤児の感情などはかなぐり棄てる効果があった。

康成の文学的教養をつちかったものは、小学校のころから乱読した文学書である。当時の子供たちの心をひきつけた立川文庫や、押川春浪の冒険ものなどを読んだ。中学校に入ってからには「新潮」「新小説」「文章世界」「中央公論」などの雑誌を読み、上級になってからは白樺派とくに武者小路実篤の作品を読んだ。上司小剣・長田幹彦・谷崎潤一郎の作品にも親しんだ。